

1980年 春季研究発表会

1980年度春季研究発表会が、3月27日、28日、29日(見学会)、仙台市民会館で開催されました。いくつかの新しい試みのあったこの大会は東北大学御園生善尚教授を実行委員長とする東北支部の実行委員会によって準備されました。以下は大会のルポ報告です。

省エネ問題 特別セッション

特別テーマ「省エネルギー問題」に関して、特別講演と若干の一般発表に加えて、新しい企画、特別セッションが行なわれた。第1日の午後、東北大外島 忍 教授の「省エネルギーに関する諸問題」という特別講演のあと2時間の、5つの発表(各20分)と討論である。このセッションは、東大の茅陽一教授と、電力中研の森清堯氏が企画されたもので、一般の応募発表ではなく、依頼ないしは招待発表のみで、省エネに関するマクロな視点の研究が示された。

まず、茅氏の、なぜ省エネをするかに始まり、現在の動向、方策、政策などを問題点とともに示す総論があった。続いて、小さなモデルとやや大きいモデルによる省エネ効果をみる経済分析の発表が2件、具体的なシステムへのアプローチとして、電力中心のエネルギー・モデルと、小都市のエネルギー・システムの解析の各1件が発表された。省エネ、省エネと呼ばれてみても、具体的には研究に手を付けてなかったり、始めてみてもあれこれ模索中の者にとり、非常に良い勉強になったと思う。

「1人で勉強しようとする、時間も労力も要るのですが、こうして要領よく聞かせていただくと、エネルギーを節約して勉強でき……」という、懇親会での千住鎮雄副会長のスピーチ通りであった。このセッションの内容は本誌6月号に特集されるそうなので期待したい。

今後を勧めたい 特別セッション形式

このセッションの運営には、次のような特徴があったと思う。①省エネ問題という(方法ではなく)問題中心のテーマを選んだ。②時局の問題をわれわれの立場からとらえた。③大きい問題を、欲張って総花的にせず、見方を絞って扱った。④企画・運営に実行委員会外の人が起用された。⑤会員に限らず、問題に応じて、周辺の研究

者の参加を求めた。

以上の結果、ことに④、⑤による効果が大きいと思うが、前半で130人、後半でも80人以上の足を釘付けにする、魅力あるセッションとなった。会場にきた半数以上の人を集めたことになる。同時セッションの方々にはおあいにく様だったが。

ただ、OR学会流の、OHPを多用する発表方法に慣れてない人々には、もう少しガイダンスをしてほしいする必要があったのではなからうか。

さて、従来の研究発表会では、特別テーマが掲げられても、一般応募発表が主だったので、せっかくのテーマについての発表が少なかったり、内容が偏ってしまったりで、全体を体系的にするのが難しかった。テーマの決定と公表が遅過ぎて、会員がテーマに合わせた研究をまとめにくいという点もあったが、今回の企画と運営は、この点では秀逸であった。参加した者は、必ず何かを得て帰ったと思う。

アメリカやカナダのOR学会では、一般の発表でも、座長やオーガナイザーを早くから決めて、内容や発表者の選択と運営をまかせているセッションが多い。またtutorial という、ある話題や方法の解説の講演もあるようだ。今回ののは、この2つを合わせたもので、総論で始めて各論に入った。

秋の東京大会前日のシンポジウムが固定化してきたが、これほど大がかりにせずとも、これとは別に、ひとつのテーマで、1、2時間を3、40人ほど集められる程度のもので、オーガナイザーに運営をまかせるセッションを、これから毎回ひとつ、ふたつ設けてみてはどうだろうか。

定着したが新味もあったペーパー・フェア

ペーパー・フェアを始めて7年、この形は特色あるパターンとして定着してきたし、今回新しい工夫もあった。

ペーパー・フェアを、単に長い待ち時間の発表と考えると、ポスターではなくOHPが使われて散歩しながら眺めることが難しかったり、ブースにイスが沢山あって小発表セッションになったり、といろいろ邪道のこともあったが、ポスター・フェアという形に落ち着いてきた。ウインドウ・ショッピングをして(ポスターをながめて)から、興味がある品があると店に入って主人に話を聞いてみる、という形は、多人数の多目的を、同時にかなり満たしてくれるようだ。

第1日のある時刻の各ブースのお客さん(含発表者)の人数の分布: 7人, 3, 8, 1(客待ち中), 10, 0(ポスターもなくキャンセルか?), 18, 4, 3, 3, 6, その他に中央のたまり場に60人ほどがお茶に、議論に。3人というところは、坐り込んでゆっくり討論。18人のところはもう黒山の人という感じ。これは、XYプロッタで、いかに無駄な動きを省いて道路地図を描かせるかという、絵の多い、ペーパー・フェア向きのお話。人数の多い少ないにかかわらず、各ブースとも、ペーパー・フェアならではの趣きでやっていた。

今回の新味や特色は、①40~60分の持ち時間ではなく、ポスターは1日中さらしものになり、発表者は、他のセッションの休憩時間に、25分×2回ブースに張りついて説明する。②各ブースは、テーブル1, イスが2, 3で立見席中心。③会場全体が休憩室(たまり場)でお茶のサービスが中央にあり、その周囲に11のブース。

お店の中には、地元企業の出し物で、PRめいたが、実物模型や、ビデオテープの放映と、ポスターが立体的に拡張されたものもあった。研究内容によっては、こんな方法のプレゼンテーションも面白い。地元だけでなく、広島大の尾崎さんのグループが、ワイブル分布のパラメータをマイコンを用いて推定するインストラクションをビデオに収めていたのにも感心した。(真鍋龍太郎)

杜の都の研究発表会に参加して

——大会2日目レポート——

仙台から東京へもどる特急列車に乗っていると東北新幹線の工事現場が目につく。もう架線の張られている所もあれば、まだ足場の鉄骨だけの部分もある。つい先ほど発った仙台駅の立派さに比べて、さまざまな状態があるのがおもしろい。杜の都の春季発表会に出席した直後のせいだろうか、工事のスケジューリングはうまくいっているのか、また、新幹線の省エネルギー対策がどうなっているのかが何となく気になる。今回の大会は私にと

って楽しいものであった。まだ記憶に新しい昨日のことを中心に研究発表会の印象を思いつくままに述べてみたい。

2日目の最初は、田口東氏(東大、現山梨大)の特別講演だった。田口氏の発表は毎回話題となるが(前回、伊理氏と共同でペーパー・フェアで行なったプロッタ描線の発表も評判だった)今回は、十分な時間もあり、難解な連続体上の流れの問題を仙台市を例に、数多くの図を用いて実にわかりやすく、しかも厳密に説明された。講演後の活発な討論(個人的なものも含めて)もそれを物語っていたといえよう。

もう1つの加藤氏(常磐共同火力)の特別講演も、体験にもとづいて、省エネルギー問題に関する国民的合意の重要性を力説され、たいへん説得力に富んだものであった。たとえば、火力発電所で、排煙をきれいにさせるために、不要なエネルギーが使われているとの指摘は私には驚きであった。

恒例のペーパー・フェアの様子にも触れておかねばならない。休憩室と同じ場所にセットされた会場では、内容はもとより、多くの発表が独自の工夫をこらしてありどこも満員の盛況だった。会場をセットされた関係者の方々のご苦労は大きなものであったと想像される。印象に残ったのは、橋氏(東北電力)による農事用冷暖房装置(実物大の模型)と有田氏等(広島大)によるグラフィックシステムのビデオを用いた発表である。どちらもアイデアがすばらしく、今後はこの方向の発表が増えていくものと期待される。ただ、残念なのは説明時間中にもかかわらず発表者が不在のセッションがいくつか見られたことである。関係者の猛省を促したいと思う。

また、一般講演で特に興味を感じたのは、参加していたB会場(数理計画)で発表されたものだけで恐縮だが、鈴木誠道氏(上智大)による車両運用法の算法(車両滞留両数グラフという比較的単純な方法によるもの)と、山下浩氏(小野事務所)による制約付き最適化問題を解く算法に対する有効制約戦略(一般的なわく組みでとらえる)の講演であった。対象は異なるが、いずれもインプリメントされたら十分実用になるのではないだろうか。

列車も宇都宮を過ぎ家並みも都会らしくなってきた。それでもあいかわらず工事現場は目につく。次回、東北で大会があるときには、新幹線ができてのことだろう。そのときのOR学会の盛況を願いつつ筆をおくことにする。(寺野隆雄)